慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	受容史的視点から観たゴットフリート『トリスタン』の「ミンネ」の特異性
Sub Title	Die Originalität der Minne in Gottfrieds ,,Tristan" aus rezeptionsgeschichtlicher Perspektive
Author	中林, 練(Nakabayashi, Ren)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2014
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.106, (2014. 6) ,p.332 (49)- 347 (34)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01060001-0332

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

受容史的視点から観た
ゴットフリート『トリスタン』の「ミンネ」の特異性

中林　練

1. 序

いわゆる「トリスタン物語」というと今日では19世紀のドイツの作曲家リヒャルト・ワーグナー（Richard Wagner, 1813-1883）の有名な楽劇『トリスタンとイゾルデ（*Tristan und Isolde*）』(1859年完成、1865年初演）を思い起こす人が多いと思われるが、この楽劇が下敷きとしている作品が、13世紀に成立した叙事詩『トリスタン（*Tristan*）』[1]である[2]。その作者はゴットフリート・フォン・シュトラースブルク（Gottfried von Straßburg, 1215頃没）であり、この叙事詩自体もまた、ゴットフリートがそれ以前に既に語り継がれていた「トリスタン物語」(Tristanroman）を下敷きにした「再話」である[3]。

ゴットフリートの『トリスタン』はワーグナーなどによって19世紀に再認識され、それが今日に至るまで「トリスタンもの（Tristanbearbeitungen）」が小説や演劇や映画として枚挙に暇がないほど生み出され続ける源泉となっていることからも疑いようがない[4]。しかし、少なくとも今日に至るまで影響を与えている高名な作品であるにもかかわらず、ゴットフリートの叙事詩『トリスタン』自体は難解とされ、研究者たちばかりがこの作品の解釈に頭を悩ませているようにも思われる[5]。それはこの物語が、今日の人々が一般的に認識している「恋愛」とは異なり、中世の宮廷文化を背景にもつ「ミンネ（*minne*）」を主題としているからである。ではまずその「ミンネ」とは今日の「恋愛」とはどう異なるのであろうか。それを考える

にはまず「宮廷風恋愛」の概念をまず押さえておく必要がある。

2. 宮廷風恋愛

2.1 宮廷風恋愛の基本形態

「宮廷風恋愛」という概念自体は19世紀のフランスの文献学者ガストン・パリス（Gaston Paris, 1839-1903）によって一般化されたものである[6]。しかしその定義づけを巡り今日まで膨大な議論が続けられているものの、その決着は全くつきそうにない。「宮廷風恋愛」を、その全てに通用するような普遍的概念として明確に定義することが極めて困難だからである。ドイツの中世学者ヨアヒム・ブムケ（Joachim Bumke, 1929-2011）の見解に従えば、「宮廷風恋愛と呼ばれるものが内包する（中略）矛盾対立に対しては簡単に目を閉じてしまうというのでないならば、宮廷風恋愛という現象を（中略）内容的規定によって十分に把握することは（中略）ほとんど不可能であることを認めざるをえない」[7]のである。

しかしそれでも、「実にさまざまな現れ方をする宮廷風恋愛に共通普遍のものとしてなおも残るのは、ある非常に本質的なこと、すなわち愛というもののもつ宮廷独特の性格である。それは何かと言えば、構想された宮廷社会の中に愛がどのように組み込まれているかということなのである」[8]とブムケは論じる。したがって宮廷社会における独特な人間関係を条件とした上でこそ生じ得る男女の多様な「恋愛」関係を、さしあたり様々な「宮廷風恋愛」の諸相と見做し、その一部を細かく検討することは可能である。つまり宮廷の封建的主従関係、婚姻関係等を前提条件とした上で、騎士と、大抵の場合その主君との婚姻関係にある貴婦人との親密な（おそらくは主従を超えた）男女関係の諸相について、それらの個々のあり方を分析、考察することは可能である。そしてこの騎士と（既婚の）貴婦人との親密な男女関係が概して「宮廷風恋愛」の観念の基本形態となっており、その意味では本質的に「姦通（Ehebruch）」という問題を内包しているものなのである。

2.2.　宮廷風恋愛としてのミンネ

このような「宮廷風恋愛」の観念の基礎を築いたのがまさに12世紀のフランスの宮廷恋愛歌人（トゥルバドゥール）たちである。そしてこの恋愛観が、フランスの宮廷文化の影響を受けていた、同時代のシュタウフェン朝期（1138-1208, 1215-1254）の神聖ローマ帝国の宮廷にも受容された。中高ドイツ語の「ミンネ」という概念はこのような文脈で「宮廷風恋愛」と見做される。「ミンネ」は、とりわけミンネゼンガー（Minnesänger）と呼ばれる宮廷恋愛歌人たちの作品を始めとする、様々な中高ドイツ語の宮廷文学諸作品が次々に成立したことによって、フランスの宮廷におけるのと同様に多様な形態を持つに至った。この時期に騎士の「女性奉仕の義務は、騎士の徳目訓の中で重要な位置を占め」[9]ることとなる。それが「騎士道」として現実社会において体系的、実質的に機能していたかどうかは、例えばホイジンガ（Johan Huizinga, 1872-1945）などが以前から洞察していたように疑問と言わざるを得ないとしても、少なくとも宮廷恋愛文学の中に描かれている「ミンネ」に基づく女性への「奉仕」は、それが騎士の恋愛の理想として宮廷社会において賞賛されていたことを示している。その意味で「ミンネ」は彼らの宮廷社会での立ち居振る舞い、教養に少なからず影響を与え、恋愛に関する議論も活発化させたと考えられるのである[10]。「いずれにしても、宮廷風恋愛の本質を説明せんとして、ほとんど常に何よりも重要とされたのは奉仕思想であった」[11]とブムケは述べている。「ミンネ」はこの女性への「奉仕」の思想を通して盛期中世の中高ドイツ語圏の宮廷社会において人々の最大の関心事の一つとなる。「トリスタン物語」はこのような宮廷社会において成立した背景をもっている。

3.　トリスタン物語

3.1　「トマ系」と「ベルール系」

文献学上は「トリスタン物語」は9世紀頃のケルト言語文化圏のいくつかの駆け落ち伝説に起源があり、それらがフランスの宮廷に伝わったことによって「宮廷風恋愛」のエッセンスが盛り込まれたとされる。そこ

から派生して12世紀から16世紀にかけて次々と成立した「トリスタン物語」は各々の影響関係や特徴によって二つの系統に大別される。ひとつはブリタニエのトマ（Thomas von Bretagne, 1170頃）を典拠とする系統である。この系統には主に三つの影響関係の流れがあり、すなわち、a）ゴットフリートの『トリスタン』と、その未完部分を完結させたウルリヒ・フォン・トゥールハイム（Ulrich von Türheim, 1195-1250）、ハインリヒ・フォン・フライベルク（Heinrich von Freiberg, 13世紀）らの「トリスタン物語」、そしてそこからチェコ語による「トリスタン物語」に「若干の影響（einzelne Einflüsse）」[12]を与えた流れ、b）イングランドのトマス・マロリー（Sir Thomas Maroly, 1399-1471）の中英語による『サー・トリストレム（*Sir Tristrem*）』(15世紀）からよりスケールの大きな「アーサー王物語」の伝統に組み込まれていく流れ、c）ノルウェーの宮廷でホーコン4世（Håkon IV. Håkonsson, 1204-1263）に仕えていた修道士ローベルト（Bruder Robert, 13世紀）の古ノルド語による『トリストラムとイソンドのサガ（*Tristrams saga ok Ísöndar*）』(1226）から北欧へと伝承されていった流れである。この系統は「トマ系」、あるいは「風雅体系」などと呼ばれ、洗練された文体をもち、主に宮廷社会において展開し、その分ケルトの伝説に由来する異教的要素が薄く、細やかで分析的な心理描写に秀でているところなどに特徴がある。

もう一つはトマと同時代のフランスの宮廷詩人ベルール（Béroul, 1180頃）による「トリスタン物語」を発端にした流れである。すなわち、ベルールとより古い「トリスタン物語」を典拠とした、アイルハルト・フォン・オーベルク（Eilhart von Oberg）による中高ドイツ語の『トリストラント（*Tristrant*）』(12世紀）により、先述のウルリヒ・フォン・トゥールハイム、ハインリヒ・フォン・フライベルク、そしてチェコ語による「トリスタン物語」に「決定的な題材上の影響（Grundlegender stofflicher Einfluss）」[13]を与える流れである。この系統は「ベルール系」あるいは「流布本系」などと呼ばれ、アイルハルト版を中心にして後の民衆本、戯曲など一般市民向けの散文作品への影響が顕著であり、ケルトの伝説にあった荒々しい口承

文芸的要素、異教風の要素を濃厚に受け継いでいるところに特徴がある[14]。

4. ゴットフリートの『トリスタン』とアイルハルトの『トリストラント』

4.1. アイルハルトの中世における大衆性

各々の系統の物語の細かな相違を比較検討していくことは本稿の目的ではないが、受容史的視点からここで確認しておくべき点が二点ある。

一点は「トマ系」のゴットフリートの『トリスタン』の他作品への影響範囲が「ベルール系」のアイルハルトの『トリストラント』のそれに比べてはるかに狭かったということである。ゴットフリートの『トリスタン』はアイルハルトのもののように大衆的な支持を得られたとは考えにくい。というのもゴットフリートの『トリスタン』は今日11の写本と17の断片として残っているばかりであり、そのどれも13世紀から15世紀までのものである[15]。ゴットフリートの『トリスタン』は当初から専ら宮廷などで一部の人々に支持されたのみで、15世紀頃までに急速に読み手を失っていったと考えられる。ミュラー（Christoph Heinrich Myller, 1740-1807）によってゴットフリートの『トリスタン』が公刊されるのは1785年になってからであり、それまでゴットフリート版はおよそ300年は忘却されていたのである[16]。その一方でアイルハルトの『トリストラント』は15世紀の完全な写本が今日まで伝わっており、同時期にその散文版が書かれ、活版印刷術が発明されたことにより、それが民衆本として市民を中心に広く普及しており、17世紀までにすでに14版を重ねていることが分かっている[17]。そしてハンス・ザックス（Hans Sachs, 1494-1576）によって『トリストラントと美しき王妃イザルトの悲恋（Von der strengen Lieb' Herrn Tristrant mit der schönen Königin Isalden）』(1553）として戯曲化されたのもアイルハルト版である。ゴットフリート版の残された写本や断片の状況と比較すると、アイルハルト版は中近世（特に15世紀以降）における一般大衆への影響力において傑出していたことは明白である。そしてゴットフリート版は19世紀のワーグナーの楽劇や研究史を中心とした今日にいたるまでの影響を鑑みると、中世ではなくむしろ近代（特に19世紀以降）に入ってから再評価さ

れた面が強いということが分かる。

そしてもう一点はトマ、ベルール以降、様々な言語による「トリスタン物語」、あるいはそれから影響を受けた作品[18]が各地で生み出されたことからも分かるように、少なくとも17世紀までは「トリスタン」にまつわる伝説それ自体はヨーロッパ中で広く認知され、親しまれていたということである。このことからも、中世においては中高ドイツ語圏の多くの民衆はアイルハルト版を通してこの物語に親しんでいたということが窺える。

4.2. 近代的「ミンネ」観からのゴットフリート再評価

中世において「ベルール系」(特にアイルハルトの『トリストラント』)が「トマ系」(特にゴットフリートの『トリスタン』)に比べ、より親しまれ得た理由として、アイルハルトの散文版の普及だけではなく、物語における「姦通」の捉え方に関するアイルハルトとゴットフリートの根本的な違いが挙げられる。それは先述の「ミンネ」の捉え方の違いにも関係しているものである。

明らかに「姦通」を断罪しているアイルハルトの『トリストラント』の一種の「明快さ」、「倫理性」に対し、ゴットフリートの『トリスタン』では、「姦通」が齎す疾しさは微塵も描かれていない。これは内容的には「媚薬(Minnetrank)」の効果の相違とも関係がある。ブムケに拠ればアイルハルトの作品で「姦通」という「不幸の起こった原因は、愛の媚薬の持つ魔術的な強制力によるもの」[19]である。つまり「姦通」とは「媚薬」という異教的な「魔術」によって引き起こされた「不幸」であり、四年間という媚薬の効果が切れると、逃避行中の森という不安の中で過ごしていた二人は我に返ってマルケ王の宮廷に引き返す。つまりアイルハルト版のトリスタンとイゾルデとの「ミンネ」にはケルトの伝説以来の異教的な「魔術」という側面が強く、「ミンネ」を「姦通」という「罪」に結びつけやすい構造になっている。

一方ゴットフリート版では「愛の媚薬の効き目にもはや期限は付けられていないから、姦通も永続的であり、愛し合う二人の関係は、死を迎える

ことによってようやく終結するのである。そして姦通のもつ道徳的な問題は、ゴトフリートにおいては全く論じられない。それどころか姦通の愛の描写は封建的な婚姻に対する批判と連動している」[20]。つまり「媚薬」には二人の潜在的な「ミンネ」を顕在化させる契機としての役目しかなく、「ミンネ」に「魔術」の意味合いは希薄である。そしてそれによって二人には以前から意識的であれ無意識的であれ互いに好意的感情（それを「ミンネ」と呼べるかどうかは別としても）があったことも可能性として示唆される。そしてワーグナー以降の「トリスタンもの」で近代的に解釈され強調されたのもこの点である。例えばワーグナーは、楽劇でこの「媚薬」の場面から物語を展開し、トリスタンとイゾルデが互いにもっていた潜在的な好意的感情を、「媚薬」を「毒薬」とすり替える発想によって、「死」と結びついた宿命的な「恋愛」として顕在化させ、その「恋愛」を、いわば近代的「ミンネ」観として象徴化した[21]。

このような近代的「ミンネ」観の影響は現代まで続いている。例えばイギリスの作家ローズマリー・サトクリフ（Rosemary Sutcliff, 1920-1992）による再話『トリスタンとイズー（Tristan and Iseult）』(1971）で、サトクリフは「媚薬」を登場させず、その理由として「彼らの中に存在していた真実でなまなましいもの、彼らの一部であるものを、魔法の薬の一種を飲んだ結果という、人工的なものに変えてしまう」[22]からだと述べている。これは彼女が言うように「ケルトの源泉」[23]に立ち返るものというよりは、むしろアイルハルト版の「ミンネ」を現代の立場から批判するものとして機能している。また更に近年の映画『トリスタンとイゾルデ（Tristan & Isolde）』[24]（ケヴィン・レイノルズ監督、2006年）においても負傷したトリスタンをイゾルデが介抱する出会いの時点で二人はすでにはっきりと相愛の関係になり、もはや「媚薬」は登場しない。これらの近代以降の「トリスタンもの」の作品はいずれも、ゴットフリート版のもつ「媚薬」の意義の薄さを、逆にトリスタンとイゾルデの潜在的、あるいは内面的な繋がりの濃さと解釈することによって、ゴットフリート版の物語における、アイルハルト版には見られなかった恋愛描写の「非中世性」と、近代以降の

人々がイメージする情熱的な恋愛との「連続性」を読み取っている。しかし同時にそれによって近代以降の受容者には、中世の「ミンネ」が本質的に抱えていた「姦通」という問題へのゴットフリートの対処が完全に見過ごされている。つまり「姦通」という問題は、近代以降の「トリスタンもの」とその受容者には、トリスタンとイゾルデの恋愛の「情熱」によって簡単に乗り越えられ、忘却されるものと見做されてしまっているのである。

5. ゴットフリートの「ミンネ」

5.1. 罪の「救済」の必要性

中世においてはトリスタンとイゾルデの「姦通」関係が「罪」に当たるか否かがより緊張度の高い問題であった。アイルハルト版ではそれが「罪」とされていることによって、キリスト教的教訓が込められた民衆本として支持を得た。ゴットフリート版では二人の関係は、むしろ宮廷社会における封建的で、形式的な婚姻（マルケ王とイゾルデ）に対しての批判的見地に立って、「罪」が救済され「清らかさ（*reinekeit*）」へと肯定的に捉え返される。それを論じる上で重要なのはゴットフリートの『トリスタン』における、「罪」を救済するものとしての「ミンネ」の性質と、その寓意としての「ミンネの洞窟（Minnegrotte）」(v. 16683-17278）の役割である。

5.2. 物語の基調としての「清らかさ」

ゴットフリートはトリスタンとイゾルデの関係について、すでに「プロローグ（v. 1-244）」で「清い愛（*reine liebe*）」(v. 96)、「清い恋（*reine sene*）」[25]（v. 127）あるいは「清い誠（*reine triuwe*）」(v. 178）であると表現していて、また「二人の誠の純粋さ（*ir triuwen reinekeit*）」(v. 231）を称え、物語の基調としている。この「清らか（*rein*）」であること、reinekeitとは、現代語において「清らかさ（Reinheit）」、「純粋さ（Lauterkeit）」、あるいは「汚れのないこと、純潔（Keuschheit）」を意味し、密会を重ねる二人の関係にはなじまない表現であるように思われる。しかし、ゴットフリートはこの物語において二人の関係の「清らかさ」を適度に言葉遣いに

変化を持たせつつ明確に重視し、二人にその恩恵を齎すものとしての「ミンネ」を描いている。例えばトリスタンとイゾルデが仇怨関係を忘れ、恋愛関係に転じる契機となる「媚薬」を飲み、相思相愛の仲になった時も、ゴットフリートは以下のように「ミンネ」に基づいて二人の関係が「清らか」になったことを強調している。

diu süenærinne Minne
diu hete ir beider sinne
von hazze alsô gereinet,
mit liebe alsô vereinet,
daz ietweder dem andern was
durchlûter alse ein spiegelglas. [26] (v.11725-11730)

ここで「争いを好まぬミンネ（*diu süenærinne Minne*）」が二人の「敵意（*hazze*）」を「洗い落とした（浄化した）（*gereinet*）」ことで二人は互いに「鏡のように清らか（*durchlûter alse ein spiegelglas*）」になる。そして「ミンネ」には、一般的に「姦通」の始まる罪深い場面であるこの場面で、あえて敵意の「宥和（Versöhnung）」、心の「浄化（Reinigung）」を齎すというポジティヴな役割が与えられていることが分かる。ではそれは「罪」までも「清らか」にするものなのだろうか。

5.3. 「ミンネの洞窟」

それを探る手がかりの一つが、ゴットフリートの『トリスタン』にのみ明確に描写された「ミンネの洞窟」と呼ばれる場面の意義である。他の「トリスタン物語」と明らかに一線を画しているこの場面はゴットフリートが敢えて強い意図をもってトリスタンとイゾルデの「ミンネ」を寓意的に描いている、物語上の一つのクライマックスであると考えられ、フリードリヒ・ランケ（Friedrich Ranke, 1882-1950）を始めとする研究者たちによるゴットフリートの「ミンネ」観解釈において以前からとりわけ重視されてき

た。この場面におけるランケ以降の先行研究の特徴は「ミンネ」を一種の宗教的なまでの一つの理想として解釈するものであるが、その論点は「ミンネ」が宮廷社会の理想や、キリスト教の理想と対立するのか調和するのかというものである[27]。しかし「ミンネ」を最大の理想と捉えてしまうと、その観点からは結果的には、「罪」を簡単に乗り越え、あるいは忘却するものとしての「ミンネ」観しか結論は出せないのではないだろうか。ここでは他の中世的理想との対立や調和についてまで論じることはせず、むしろ前章で論じた近代的「ミンネ」観とゴットフリートの「ミンネ」の「連続性」に対し、この章では「非連続性」を際立たせるために、あくまでもゴットフリート『トリスタン』において特徴的である、「罪」を救済するものとしての「ミンネ」の独自性について論じる。

5.4. 「ミンネの洞窟」における献身的な「女神ミンネ」

トリスタンとイゾルデの「清らかさ」がゴットフリートの『トリスタン』の基調となっていることは前に触れたが、「ミンネの洞窟」でもゴットフリートは「ミンネ」についてこのように述べている。

> *diu minne sol ouch kristallîn*
> *durchsihtic und durchlûter sîn*.[28] (v.16987-16988)

「ミンネの洞窟」の場面は、他の「トリスタン物語」においては、マルケ王に姦通の疑念を抱かれ、追放されたトリスタンとイゾルデが入り込む森の場面として描かれている。「ベルール系」では「媚薬」の切れる場面でもある。しかしゴットフリートの『トリスタン』では二人は逃避行中に森ではなく、この洞窟を見出す。この場面を明確に洞窟として描いているのはゴットフリート版のみである。ゴットフリートによってこの場面で詳細に記述される彼らの暮らしは、「異教徒の時代に（*under der heidenischen ê*）」(v. 16694)、「女神ミンネ（*gotinne minne*）」(v. 16727）に捧げられたとされる洞窟での、「ミンネ」による「理想の生活（*wunschleben*）」(v. 16850; v.

16876）である。ここで注目すべきは、女性的に擬神化された寓意的な「ミンネ」がトリスタンとイゾルデを労う描写である。

in streich diu liebe, ir erbepflouc,
niwan an iegelîchem trite
und ze iegelîchen stunden mite
und gab in alles des den rât,
des man ze wunschlebene hât.[29] (v. 16846-16850)

このように「ミンネ」によって、二人は騎士（トリスタン）が貴婦人（イゾルデ）に「奉仕」する関係（いわゆる先述の「宮廷風恋愛」の基本形態としての「ミンネ」による関係）にあるのでは全くないことが分かる。むしろ「ミンネ」からの二人への献身によって、「理想の生活（*Wunschlenben*）」が成り立っていると読み取れるのである。
さらにこうも述べられている。

ir hôchzît was diu minne,
ir fröuden übergulde,
diu brâhte in durch ir hulde
des tages tûsent stunden
Artûses tavelrunden
und alle ir massenîe dar.
waz solte in bezzer lîpnar
ze muote oder ze lîbe?
dâ was doch man bî wîbe,
sô was ouch wîp bî manne:
wes bedorften si danne?
si heten, daz si solten,
und wâren, dâ si wolten.[30] (v.16900-16907)

つまり「ミンネ」によって「宮中御宴（*hôchzît*）」で何不自由なく労われ、「持たねばならぬものを持ち、いたい所にいた（*si heten, daz si solten, und wâren, dâ si wolten*）」トリスタンとイゾルデ、という構図は、満たされぬ「姦通」としての「ミンネ」を捧げる騎士と、それを受ける貴婦人、という構図とは明らかに異なっている。そしてゴットフリートの、「彼らはただやみ難い心の動きがさせることだけをした（*sine tâten niht wan allez daz, / dâ sî daz herze zuo getruoc*）」(v.17244-17245)、「彼らは常に自分たちの気に入り、心に適うことしかしなかった（*ir geschefede unde ir pflege / was alle zît und alle wege / niht anders wan des sî gezam / und in ze muote rehte kam*）」(v.17275-17278）などの記述は、トリスタンとイゾルデの「清らかさ（*reinekeit*）」を具体的に示している。つまりこの場面は、二人が「姦通」の「罪」を認識する森として描かれる「ベルール系」の物語とも対照的である。ゴットフリート版ではむしろ「女神ミンネ」の献身的な労いにより二人の「罪」を癒し、「清らか」にするということが、この場面の積極的機能とされているのである。

5.5. ゴットフリートの「ミンネ」観としての構図

このような罪を救済する、あるいは癒す女神としての「ミンネ」は『トリスタン』全体から見ても特徴的である。それはゴットフリートの『トリスタン』において医療的行為（Heilkunde）が特に女性によってなされていることとも関連する。例えばイゾルデの母イゾルデは医療に関する深い知識を持っているとされている（v. 7297-7303）。そして結果的に彼女は負傷したトリスタンを治療することになる（v. 7771-7965）。娘であるイゾルデも同様にトリスタンを介抱する（v. 9616-9623）。またミンネ自体が「医師（*arzâtinne*）」として密会の際のトリスタンとイゾルデを、互いが互いの「薬（*arzâtîe*）」として結び付ける寓意的描写もある（v. 12161-12179）。ここでも「罪」(病）を、救済（治療）する「ミンネ」がトリスタンとイゾルデを「清らか」にするという、ゴットフリート独自の「ミンネ」観としての構図

を浮かび上がらせている。このように「罪」を救済する女神としての「ミンネ」の寓意がゴットフリートの『トリスタン』においては非常に独創的に描かれている。

6. 結び

受容史的観点から見たゴットフリートの『トリスタン』における「ミンネ」は19世紀の再評価を受けて解釈し直されたことによって、今日の恋愛観との「連続性」を見出され、今日でも「トリスタンもの」が生み出される原動力となっている。それは中世に大衆的に支持を得たアイルハルトにはなし得なかったことである。奇しくもゴットフリートの「ミンネ」は中世にあって決して中世的なものにはとどまっていなかったという意味での特異性がまずこの点に一つ見出される。またゴットフリートの『トリスタン』の基調としてある「清らかさ」という要素、そしてゴットフリートのみが描いている「ミンネの洞窟」、そして「罪」を救済する女神としての「ミンネ」という視点は彼の「ミンネ」の特異性を考える上で、また近代的「ミンネ」観からは読み取れない「非連続性」について論じる上でも、新たな「ミンネ」解釈のために不可欠な視点であると考えられる。そして「ミンネ」をそのように捉えることで、その「医療」や「女性」という要素との関連の重要性についても展望が開けるのである。この点に関しては稿を改めてより詳しく論じたい。

註

1　テキストには Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Bd. 1: Text hrsg. v. Karl Marold. Berlin, New York. 1977. を使用した。参照、引用箇所は本文中に行番号で示した。

2　Vgl. Peter Wapnewski: *Tristan der Held Richard Wagners*. Berlin Verlag. Berlin. 1981 (2. Ausg. 2001), S. 73-78.

3　ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクについては、13世紀初めに中高ドイツ語による『トリスタン』を著したこと以外確かなことは分かっていないが、彼の『トリスタン』は作中の記述によって、12世紀フ

ランスの宮廷詩人ブリタニエのトマによる「トリスタン物語」に依拠しているものであることが示唆されている（v. 131-166）。

4 Vgl. Tomas Tomasek: *Gottfried von Straßburg*. Reclam. Stuttgart 2007, S. 301-308.

5 一般的に今日のドイツ語圏の人々にとっても中高ドイツ語文献は、Germanistik を学びでもしない限り読みこなすのは決して容易ではなく、いくつかの作品の場合現代語訳あるいは対訳版が市販され普及してはいるものの、少なくともいわゆる「トリスタンもの」に関してはヴァーグナーの楽劇の影響もあり、多くの人にとって後世の現代語による作品の認知度の方が圧倒的に高く、それらに対する親近感も強いということは否めない。

6 Vgl. Joachim Bumke: *Höfische Kultur. Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter*. Deutsher Taschenbuch Verlag. München 1986, S. 504.

7 Ebd., S. 505. 引用箇所の訳文はヨアヒム・ブムケ『中世の騎士文化』(平尾浩三、相沢隆、三瓶慎一、和泉雅人、斎藤太郎訳）白水社、1995年、471頁。

8 Ebd. 引用箇所の訳文も同上。

9 Ebd., S. 507. 引用箇所の訳文は同上、473頁。

10 ホイジンガの古典的名著『中世の秋』(*Herfstiij der Middeleeuwen*, 1919) を参照。特にその第4章から第9章で「騎士道」と現実の騎士の実態との相克について、また中世の宮廷における騎士の「女性奉仕」の理想についてが重要なテーマとして詳細に論じられている。また vgl, Bumke, S. 503-558.

11 Bumke, S. 512. 引用箇所の訳文は『中世の騎士文化』、478頁。

12 Vgl, Tomasek, S.287.

13 Ebd.

14 「風雅体系」(「トマ系」)、「流布本系」(「ベルール系」）といった区分と特徴については佐藤輝夫『トリスタン伝説　―流布本系の研究―』中央公論社、1981年、また石川栄作『トリスタン伝説とワーグナー』平凡社、2013年、参照。また「トリスタン物語」の各々の影響関係については vgl. Tomasek: *Gottfried von Straßburg*., S. 249-287, bes. S. 286-287 (Schaubild 3: Entstehung und Entwicklung des Tristanromans im Mittelalter).

15 Vgl. Tomasek, S. 45-48.

16 Ebd., S. 301.

17 『トリストラントとイザルデ』(ドイツ民衆本の世界 IV）（小竹澄栄訳）国書刊行会、1985年、350頁、参照。

18 13世紀にダンテ・アリギエーリ『神曲』(Dante Alighieri: *La Divina*

Commedia) にトリスタンとイゾルデが登場することや、いわゆる「アーサー王物語」においてトリスタンが「円卓の騎士」の一人として取り入れられていること。また14世紀頃にアイスランドで書かれた『グレティルのサガ（*Grettis saga*）』に登場する主人公グレティルの兄「トルステイン（ *orstein*）」の恋愛話は明らかに「トリスタン物語」の影響を受けていることなど。

19 Bumke, S.558.（訳文は『中世の騎士文化』、518頁。）

20 Ebd.

21 『トリスタン伝説とワーグナー』、第4章、参照。

22 ローズマリー・サトクリフ『トリスタンとイズー』(井辻朱美訳)、沖積舎、2005年、11頁。

23 同上、10頁。

24 DVD が入手可。

25 ゴットフリート『トリスタン』においては、*sene* や *liebe* は *minne* という語とほとんど区別されずに用いられている。ただし *minne* に関してだけは「愛の洞窟」などで「ミンネ」を擬神的に描写する場合に用いられることが多い。例えば「女神ミンネ（*gotinne Minne*）」(v. 16727) など。

26 人をなだめる愛の女神が、二人の心から敵意をすっかり洗いおとし、愛のきずなで結び合わせたので、二人の心は互いに鏡のように全く清らかになった。(訳文はゴットフリート・フォン・シュトラースブルク『トリスタンとイゾルデ』（石川敬三訳）、郁文堂、1976年、196頁。）しかし以下本文中の個々の中高ドイツ語の語句の訳については筆者自身の調整により、必ずしも本書に従ってはいない。

27 ランケはまず教会建築と類似している「ミンネの洞窟」の内部の構造の寓意的解釈を通して、そこに古典古代の文学からの異教的、あるいは神秘主義的影響を読み取り、この場面にゴットフリートの「ミンネ」を女神とする一種の非キリスト教的な宗教性を見出した。(vgl, Friedrich Ranke: *Die Allegorie der Minnegrotte in Gottfrieds Tristan*. Berin 1925, in: *Gottfried von Straßburg*, hg. von Alois Wolf, Darmstadt 1973 (Wege der Forschung), S. 1 - 25.）この「ミンネ」の「神秘主義的」宗教性はより総括的なゴットフリートの「ミンネ」観解釈へと発展していく。やがてこの解釈の流れはシュヴィーテリング（Julius Schwietering, 1884-1962）が12世紀のシトー会修道院長クレルヴォーのベルナルドゥス（Bernhard von Clairvaux, 1090-1153）の思想とゴットフリートの「ミンネ」観との関連性を指摘した（vgl. *Julius Schwieteirng: Der Tristan Gottfrieds von Strassburg und die bernhardische Mystik, in: Mystik und höfische Dichtung im Hochmittelalter, in: Philologische Schriften*, Herausgegeben von Friedrich

Ohly und Max Wehrli, Wilhelm Fink Verlag, München 1969, S. 339-361.）ことなどにより、キリスト教カトリック的観点からも、宮廷社会的観点からも激しい議論を引き起こすこととなる。

28　愛というものは実際水晶のように透明で、全く清らかでなければならぬ。(訳文は『トリスタンとイゾルデ』、289頁。）

29　愛はいつでも彼らのそばについて行って、昔からの天職を行い、理想の生活をするのに必要なものを何でも彼らに与えた。(訳文は同上、287頁。）

30　彼らの宮中御宴は彼らの喜びの極みである愛であって、愛は彼らに恭順の意を表するために、日に千度もアルトゥース王の円卓を饗宴のお相手もろとも彼らに奉った。彼らの心や体にとってこれ以上よい食物があっただろうか。女のそばに男がおり、男のそばに女が寄り添っていた。この上二人に何が必要だったろう。彼らは持たねばならぬものを持ち、いたい所にいたのだ。(訳文は同上、288頁。）